

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
（ふりがな） たていし ゆうじ 立石 裕二			
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
（ふりがな） わた はな つとむ 渡 邊 勉		関西学院大学 社会学部	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習 I	KSGa-130705-0	19人	

## I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

受講学生たちが調査のテーマ設定から、質問項目の作成、アポ取り、インタビューの実施、記録の作成、報告書の執筆にいたるまで社会調査の一通りの過程を体験的に学習できるよう授業を運営した。班ごとにサブテーマを設定し、1人が1件のインタビューについて最初から最後まで担当する形で進めた結果、積極的に取り組む姿勢を引き出すことができたと考える。

## II. 調査の企画・設計（デザイン）

## 1. 調査のテーマ／領域：

環境問題という大まかな領域を設定した上で、学生どうして話し合わせた結果、「おもちゃと環境」、具体的にいえば、「長く使えるおもちゃとはどういうものか？」というテーマに決まり、おもちゃを題材にして持続可能な消費のあり方について多角的に調査をおこなった。

## 2. 調査の内容／概要：

おもちゃは子どもの成長にとって必要な一方で、短期間だけ使われて捨てられることが多い製品でもある。環境保全の観点からは、おもちゃをできるだけ長く使い、無用な消費を減らしていくことが望ましい。それでは、どういうおもちゃが長く使えるおもちゃなのか、現在、おもちゃを長く使えていないとしたら、その要因は何なのか。こうした問題意識から調査をおこなった。

## 3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

おもちゃの生産・流通・消費・廃棄（リサイクル）の各局面にかかわるアクターとして、玩具メーカー、小売店、消費者（子育て支援サークル）、幼稚園、自治体（廃棄物処理・リサイクル）、「おもちゃ病院」、博物館、幼児教育の専門家などを対象にインタビューをおこなった。

## 4. 主な調査項目：

「おもちゃと持続可能性」という主題のもと、「おもちゃの歴史と現状」「おもちゃメーカーの販売戦略」「おもちゃはどのような基準で選ばれているか」「おもちゃと教育」「おもちゃの循環」の5つのサブテーマを設定して調査をおこなった。

## III. データ収集の方法と結果

## 5. データ収集（現地調査）の方法：

事前に書籍・インターネットなどで情報収集をした上で、アポイントメントをとって調査に伺い、各対象者に1時間程度のインタビューをおこなった。

## 6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

2013年6月～7月、兵庫県・大阪府・奈良県などで実施した。調査員は受講学生19人と教員1人。

## 7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入）：

受講学生が録音データをもとに、詳細なインタビュー記録を作成した。対象者にも確認をとっており、十分な学術的・社会的価値を有すると考える。

## IV. データ分析の方法と結果

## 8. データ分析／解釈の方法：

班ごとにインタビュー記録をもとにディスカッションし、調査で明らかになったことを図解して把握することを試みた。また、関連する文献を読み、インタビュー中の発言が出てきた文脈を適切に解釈できるよう努めた。その上で各自がテーマをしばらくこみ、レポートを執筆した。

## 9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

1) 「昔」からあって、長持ちする伝統的なおもちゃは、現代日本の子育て場面においては十分に広まっているとはいえない。2) おもちゃが消費される背景には、「祖父母がたまに会う孫に買ってあげる」といった人間関係の構築という側面がかかわっている。3) おもちゃを壊さないように言いつけると、子どもの自由な遊びを妨げることになる。むしろ、壊れたおもちゃを直して使えるような社会的な仕組みが重要である。4) 子どもが成長すれば、遊ぶおもちゃは必然的に変わる。その中で、おもちゃを長く使い続けるには、「おさがり」「フリーマーケット」のように、個々の家庭を超えて循環する仕組みが重要である。

## 10. 報告書刊行の予定と概要：

2014年3月に受講学生のレポートを掲載した報告書を印刷・製本した。インタビュー対象者等に配布する予定である。